

自由門 学長賞「あゝ人生は怪我ばかり」

家政学部生活デザイン学科 4年1組 山際 萌香

この年齢になっても傷が絶えない。擦過傷、切傷、打撲、いずれかが必ず身体のどこかにある。傷跡に関しては脚がひどい。特に膝がひどい。戦火をくぐり抜けてきた武将の傷跡を集約したら多分私の膝みたいになる。

物心ついた時からド派手に転んできた私は、全ての衝撃を膝で受けることが多かった。いつか好きな子が転んだ時に差し出せるように日頃から持ち歩いていた絆創膏の全ては私の怪我に消費されていった。そうして小学校低学年の時から蓄積されていった傷跡は未だに消えることなく、私の膝にうっすらと浮かび上がっている。皆さんは「フラッシング反応」というものをご存知だろうか。飲酒すると顔が赤くなるあの現象を指しているのだが、私の場合それが古傷にも反映される。即ち、飲酒をすると傷跡が真っ赤になるのだ。たまには、と気が向いて慣れない酒を嗜む度に過去の失態が赤らむのでいい加減嫌気がさす。傷跡を肴に飲む趣味もなく、私はアルコール度数3%の缶をチビチビとやって顔と膝を赤く染めたまま素知らぬ顔を決め込むのが常である。

しかしこの間たまたま気が向き、例によって赤くなったその傷跡を眺めていると、怪我をするに至った経緯の一つ一つが、アルバムをめくるように容易く思い出されて来た。

ひとつは、小学生の時。

小学校の駐車場と隣接している敷地で、友達と影踏み鬼をやっていた。ちゃんと前を見ずに「鬼さんこちら！」等とお決まりのセリフを叫びながらはしゃいで走り回っていた私は、落ちた。給食センターのトラックが搬入で止まるために、地面から50~60cmほど掘り下がっていた場所だった。平均身長よりも小さかった私にとっては、とんでもなく深い海溝の底のように感じた。地面に待ち構えていたグレーチングに、全ての衝撃を膝で受け止めるように強打した。これは痛かった。落下した瞬間この心臓が1拍飛ぶような感覚が襲った。骨まで響く膝の痛み。手をついたので手のひらも擦りむいた。めちゃくちゃに泣いた覚えがある。すぐさま保健室に連行され消毒と絆創膏の処置を受け、帰宅後も染みる消毒液を塗りたくられてまた泣いた。そしてその跡は現在も私の膝に鎮座している。グレーチングの網目模様にくっきりと浮き上がったそれは、私の記憶の限りでは1番の古傷だ。小学生の若さに伴う治癒力を持ってしても傷跡の完治には至らなかったようだ。

最後に酷く転んだのは高校三年生の冬、忘れもしない12月27日だった。

当時 6km 程先の高校へ電動自転車に通っていた私は帰路を急いでいた。年の瀬でもあり、寒かったのでペダルを漕ぐ足に力を入れた。

…ここで初めて明かすのだが、コケた理由が何ともおマヌケなのだ。周りには砂利道で転んだと説明していたのだが、真相はそうではない。笑われると思ってひた隠しにしていた事実を、遂に白状しようと思う。

その時、急勾配の坂を登っていた。一息に登らなければ、途中で止まってしまうと立て直しがめんどくさい場所だ。手袋をし忘れていた。手が凍えそうだった。坂を漕ぎながら、手袋をはめようと横着を図った。ハンドルを腕だけで支えるなんて芸当はバランス感覚が乏しい私には元より無理な話である。

案の定というか、当然というか、コケた。

右側に倒れ、その衝撃を右膝で全て受け止めた結果。履いていたタイツは破れて血まみれになった。痛かったもののタイツが黒いせいでその瞬間は出血に気が付かず、うわぁ恥ずかし、横着するんじゃないよ、と自転車を起こして再び漕ぎ始めた。

下り坂に差し掛かり、やたらと膝がスースーするなと思い見てみるとギョツとした。

めっちゃ血出てるし。スースーしていた原因はタイツが破けていたのもあるが、出血のせいでもあった。自転車のペダル付近にまで僅かだが紅が滴っていて、引いた。

もう半泣きである。これだけの惨状を目の当たりにして痛み知らんぷりできない。野ざらし状態の膝に嫌という程冷たい風が吹き付けて凍てつくようだった。

痛い、寒い、恥ずかしい。屈辱の三拍子に歯を食いしばり涙を飲む。

手袋なんてはめなければ、と危うく恨む対象を間違える程に私は酷く動揺していた。無論この場合責めるべきは私の横着心である。手袋は何も悪くない。

受験期真っ只中の娘が膝に立派な擦り傷をこさえて帰ってきたので、親もさぞ驚いただろう。いつしかホコリを被っていた救急箱が億年ぶりに開けられ、薬や消毒液のあの匂いに我が失態を思い知らされて情けなく、しかしそのいたたまれない懐かしさに思わず笑ってしまった。ぱくりと口を開けた救急箱ですら私を嘲笑っているかのようだった。

いくら気をつけていても怪我や事故というものは起こり得る。巻き込まれは仕方ないが、私から巻き込む様なことがあってはならない。少なくとも不注意による怪我は極力無くしたいものだ、と傷だらけの私は今日も歩いていく。踏みしめる道に注意しながら。

<講評>

作者が生まれてこの方、何度も怪我ばかりをしていることをユーモラスな語り口で、微に入り細に入り描写している。読んでいて微笑ましくなるような感性に溢れたエッセイであり、読者の共感を呼ぶ優れた文章構成になっている。読者が目の前で怪我の現場を見ているかのような情景描写が秀逸である。誰でも怪我はする。いきなり命を落とす者だっている。

作者の怪我は、本当は大した怪我ではないのかもしれないが、その時の心細さ、情けない心情がそのまま描かれており、読む側にも懐かしい記憶を思い起こさせてくれるが、不思議と悲壯感を感じさせない。きっと皆同じような体験をしてきたからだろう。総じて、読んで思わず引き込まれる文章表現が印象的な作品である。飲酒をした際に古傷が赤くなるとの描写から、その怪我をする経緯への展開がユニークである。2回の怪我をした場面の描写も非常に臨場感にあふれており、その文章展開は読み応えがある。

エッセイコンクール審査員／富岡 治明・永田 彰子・吉目木 晴彦・大庭 由子・高田 厚